



## 月経のタブーに挑む、 心優しきヒーロー

映画は次のようなナレーションから始まる。「アメリカにはスーパーマンがいる、バットマンがいる、スパイダーマンがいる。でもインドには……パッドマンがいる」。そう、この映画は、パッドマンならぬ「パッドマン」として、月経のタブーに挑み、女性を救おうとした市井のヒーローの話である。

ことの始まりは、新婚の主人公ラクシュミの妻が、ある晩、一人ベランダで寝ると言い出したことだ。いぶかしがり理由を聞く夫に対し、若妻はしぶしぶと月経中であることを認める。無骨で心優しいラクシュミには、その行動がまったく理解できない。しかし、妻は月経がケガレであること、それゆえ隔離されなければならぬことを告げる。さらにラクシュミは、女性たちが月経中に古布を用いて、誰にも見られないように洗って繰り返し使用していることを知る。こんな汚い古い布を使って、病気にでもなったらどうするのか、二二世紀だということにまだそんなことにとらわれているのか……。結婚して初めて女性が毎月どんな大変な思いをしているのかを知ったラクシュミは衝撃を覚えるが、妻はそういうものだと諭す。市販の生理用品は高く、裕福ではない家ではそうそう買えるものではない。そこで、ラクシュミは決意する。妻が安心して使える安価で清潔な生理用品を自分の手で作ることに



公衆トイレに設置された使用済みパッド処理機。入ると焼却処理をする(マハーラーシュトラ州、2019年)

まつみ 瑞穂  
民博 超域フィールド科学研究所

## 「パッドマン — 5億人の女性を救った男」

原題：Padman

2018年/インド/ヒンディー語/140分/DVD(日本語)あり

監督：R・パールキ

出演：アクシャイ・クマール、ソーナム・カプールほか

映画のような、社会起業家が始めた小規模な生理用品製造工場(ブネー、2019年)



社会における月経のタブーについて理解しなければならぬだろう。ヒンドゥー教徒にとって、出産や死、そして月経はケガレの一種である。月経中の女性は、寺院への参拝や儀礼への参加などの宗教的行為は禁止され、厳格な地域では食事や睡眠も家族とは別におこない、なるべく人との接触を避けるようにして過ごす。わたしが調査している村では、かつて月経中の女性は現地語で「隅に座る」とよばれる隔離をおこなっていた文字どおり、女性の空間である台所から離れ、家屋の隅っこに座って過ごすのである。五日

目に月経が終わると沐浴し、髪を洗い、ケガレを落とす。そして、汚れた衣服を洗う。当然、人前で月経について話すこともタブーである。

村から街のカレッジに通う少女たちが増えるに伴い、厳格な意味での「隅に座る」という慣習は、今では若い世代のあいだではほぼ見られなくなっている。しかし、月経時に宗教儀礼に参加する女性はいまだ少ない。それはやはり、タブーを破ることへの怖れが消えないからである。女性たちは、儀式や祭礼の予定があるときには、経口ピルを飲んで月経を遅らせることもある。つまり、月経のタブーが変わるのではなく、医薬品を用いてもコントロールするという逆説が生まれているわけである。

### あらたな試み

今日では、教育の現場で月経のしくみについて学び、伝統的な因習を打ち破ろうとする試みがNGOなどによっておこなわれている。また、生物学の授業でも、排卵から受精に至る一連のプロセスを学びつつ、セクシュアリティ教育までも含むような試みがおこなわれている。同時に、学校の女子トイレといった施設面での整備や、生理用品の提供なども欠かせない。月経中の女子学生にとって、学校のトイレで清潔な水が手に入るのか、生理用品が交換できるのか、ということは通学にもかかわる重要な問題なのである。

ラクシュミは、妻を幸せにしたいという一念で、生理用品を開発した。女性たちは、自分たちでもそれを作り、小分けして売るといったビジネスを始める。それは小さなパッドに過ぎないが、女性のエンパワーメントにつながる、確かな一歩だったのである。なお、この映画は実話に基づいており、モデルとなったムルガナンダム氏は、世界中で講演をおこなっているが、今でも南インドの村でナプキン製造工場を営んでいるという。



NGOが制作したワークショップ用エプロン。女性の身体について学ぶことができる(ブネー、2018年)